

Title	聖者・預言者一族の末裔とタリーカ(スーフィー教団)の萌芽状態--現代エジプトにおけるシャイフAの事例を通じて (特集 地域研究の前線)
Author(s)	新井, 一寛
Citation	アジア・アフリカ地域研究 = Asian and African area studies (2007), 6(2): 471-488
Issue Date	2007-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/80075">http://hdl.handle.net/2433/80075</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 聖者・預言者一族の末裔とタリーカ（スーフィー教団）の萌芽状態

—現代エジプトにおけるシャイフ A の事例を通じて—

新 井 一 寛\*

### **An Islamic Saint, a Descendant of Prophet Muhammad, and the Emergence of Sufi Orders: With Special Reference to Sufi Master A in Contemporary Egypt**

ARAI Kazuhiro\*

This article elucidates the initial formation process of a Sufi order through a certain saint's relation with his devotees. This saint is a descendant of Prophet Muhammad. His devotees think that he has knowledge of Islam, special power by which he can even kill people, and personal magnetism. I consider that the community that is formed around the saint is one in which devotees share the original Islamic view of the world, and which represents the initial state of Sufi orders before systematization. Before the 19th century, when the institutionalization and systematization of Sufi orders by the state started, there were religious groups centering on a certain charismatic person in Egypt.

### はじめに

はじめに本稿で扱う事例であるシャイフ A と筆者が出会った経緯、シャイフ A の紹介、本稿の問題設定、調査内容について説明しておく。

#### シャイフ A との出会い

2004 年 10 月 6 日、アフマド・バダウィーのマウリド（生誕祭）を調査するために、筆者は下エジプトのデルタ地帯にあるカフルッシャイフ県・タンター市を訪れた。昼過ぎに、各教団のテントが集まる広場に行き、アフマディーヤ系教団のテントのなかにいた人々に話を聞いていた。そのうち、テントの奥に誘われたので行ってみると、ひげを蓄えた大柄の男性が数人を相手にイスラームに関する説教を行っていた。これがシャイフ A との最初の出会だった。はじめ筆者は彼を同教団のシャイフ（師匠）だと思っていたのだが、それは違った。シャ

---

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

2006 年 7 月 31 日受付, 2006 年 11 月 7 日受理

イフ A は、同教団のひとりに誘われてテントのなかで休養していたところ、何人かにイスラームについて説教をすることになったのであった。

筆者はスーフィー教団の調査をしていることを、シャイフ A に説明した。また、預言者一族にも興味があると述べた。すると、彼は筆者に興味をもった。彼は、「私は預言者一族である。預言者一族のことを知りたいのなら、自分と一緒にいるべきである」と述べ、今から自分の家に来るようにと筆者を誘った。筆者は他教団の調査もしたかったので躊躇したが、生誕祭が本格的に始まる夜中まで時間があつたので行くことにした。その後、何度もミニバスを乗り継ぎタンター市と同県内にあるビエツラ市に着いた。そこから、トゥクトゥクと呼ばれるミニバイクに乗り換え、15 分ほどでシャイフ A の家がある H 村<sup>1)</sup>に到着した。

シャイフ A は兄夫婦とともに暮らしていた。彼の家族構成は次のとおりである。シャイフ A は預言者一族、I 家の次男 31 歳で、不規則に漁業に従事している。カイロのアズハル大学の神学部の卒業生である。また、この家には、シャイフ A の他に、彼の家族で塗装工である 34 歳の長男と 20 歳の妻（妻はミヌーフィーヤ県の D 村に住む預言者一族である S 家出身である）、彼らの 1 歳未満の息子、カイロで会社勤めをしている 27 歳の三男、同県内のマンスーラ市にあるアズハル大学の分校で神学部に所属しイスラーム諸学を学んでいる四男、家事手伝いの 20 歳の末娘とともに住んでいた。ちなみに、シャイフ A の両親はともに他界している。

#### シャイフ A

現在、シャイフ A は仕事をせずに、宗教実践に勤しんでいる。彼の宗教実践は、エジプト各地にある一族の廟への参詣と修行のための独居、日々の規則的なズィクル（祈祷）によって構成されている。

シャイフ A によれば一族の廟はエジプト各地に数千あり、彼は年間を通じて多くの日々をそれら廟への参詣に費やしている。筆者はカフルッシャイフ県にある大小 15 ほどの廟を彼とともにまわった。そのなかには、広大な土地にぽつんと建っている小屋のなかで、ほとんど手付かずのまま埃を被った状態の棺があるだけの廟から、立派なモスクが建てられているものまで様々であった。

独居については、シャイフ A は 15 年前から不定期に行なっている。ラマダーンの時には毎年、はじめの 4 日間と終わりの 10 日間に、バハレイヤ近くの砂漠にこもり、一切寝食せずに、アッラーに集中して過ごすとのことである。

シャイフ A が日常的に行なっている祈祷は、就寝中以外の毎時間 5,000 回以上アッラーの

---

1) H 村は、綿やポテトやトマト、ナスなど様々な農作物をつくっている典型的な農村である。村には 7 つのモスクがあり、そのうちのひとつはシャイフ A の一族が建てたものである。H 村の有力アーイラ（一族）は、シャイフ A の I 族の他に 5 つあり、そのうちのひとつであるアブドゥッラー家が代々オムダ（村長）を輩出している。

名前を唱えるというものである。実際、シャイフ A と一緒にいる時に、ふと彼の口を見ると、アッラーの名前を唱えている。

最後に、シャイフ A の宗教的価値観の一端を示していると思われる内容を記述しておく。シャイフ A は、近代以降批判される傾向が強くなった宗教実践の際にみられる楽器の使用やマジズーブ（陶酔状態の者）と形容されることが多い情動的な諸行為は問題がないという。その理由は、それらがアッラーを愛していることに起因しているからである。<sup>2)</sup> また、それらと並んで、近代以降、衛生観念の発達もあり、批判・嫌悪される傾向が一段と強くなったのが、ダルヴィーシュ（托鉢僧）的な求道者であるが、これについてもシャイフ A は賞賛の姿勢をとる。<sup>3)</sup>

2005 年 2 月 8 日、髪の毛がぼさぼさで、顔は汚れており、所々裂けている汚れた服を着た男性が、杖に頼ってうつむきながらゆらゆらと歩いていた。シャイフ A は、彼のもとへ歩み寄って抱きしめ、手に口付けした。その男は何が起きたのか分からないといった様子で呆然としていた。抱きしめた腕を放すとシャイフ A はもっていたタバコ箱を彼に与えた。彼が何度も拒んだので、シャイフ A は無理やり彼のポケットにそれを押し込めた。彼も諦めたのかシャイフ A に礼を述べた。筆者が、「彼はマジヌーン（狂人）か」と尋ねると、シャイフ A は「そうだ。しかし、彼はアッラーに愛されている。彼はいつでもアッラーのことだけを考えている」と言った。

このように、シャイフ A はアズハル大学を卒業した宗教的知識人でありながらも、近代以降にイスラーム主義者やモダニスト、宗教的知識人の間で強くなった覚醒状態を重視する P 的イスラーム<sup>4)</sup>を正統とするような立場はとっていない。

## 問題設定

国家的要請のもとで教団の制度化<sup>5)</sup>が始まった 19 世紀以前のエジプトにおけるタリーカは、確固とした教義体系や定期的な宗教実践が世代を越えて継承されていくような、継続的な教団組織というよりは、カリスマ的な聖者の出沒によってその人物のもとに集まる人々が離合霧散する流動性の強い宗教集団であった [古林 1975]。しかしここで述べられている、人々をひきつけ、その存在がひとつの宗教集団形成の契機となるカリスマ的な聖者とは一体どのような存

2) 2005 年 3 月 12 日、フサイン（仮名）の結婚式の時、アッラーへの愛を感情的に表現することを推称していることで有名なアフマド・ラドワーンの長男が来ていた。アフマド・ラドワーンも、預言者一族であるという。シャイフ A は、アフマド・ラドワーンをすばらしい人物であるとして称えていた。アフマド・ラドワーンについては、V. Hoffman が調査している [Hoffman 1995]。

3) イスラームにおける近代化傾向については次を参照 [大塚 2000: 221-262]。

4) P 的イスラームについての詳細は次を参照のこと [大塚 2000: 221-262]。

5) 19 世紀以降におけるタリーカの制度化・組織化に関しては、De Jong の研究によって把握できる [De Jong 1978]。

在だったのであろうか。これについては、聖者研究の分野に先行研究の蓄積がある。<sup>6)</sup> その先行研究のなかでも、本稿にとって重要なのは、民衆がどのようにある人物を聖者として認識していたのかについての研究である [Gellner 1969; 赤堀 1995; 大塚 1989; 鷹木 2000]。本稿ではこれらの先行研究の視点を踏襲し、シャイフ A と民衆の関係性に注目し、その関係のなかでどのように、シャイフ A が聖者として認識され存立しているのか、また逆にしていないのかについて述べる。

また、従来の聖者研究では、聖者を聖者たらしめている諸要素に関する研究の蓄積があり、そこでは特に奇跡（カラーマ）と恩寵（バラカ）が注目されている [赤堀 2005]。しかし、本稿の事例紹介ではそうした諸要素に注目すると同時に、聖者と認識されることのある人物の実像をよりリアルに表現するために、類型化や分析的な抽象化の過程で切り捨てられがちなシャイフ A が聖者ではない場面も含めて「聖者」を描いている。そのため、事例紹介では、上述の聖者と民衆の関係のあり方と、シャイフ A の人物像をより実態に即して描くのに適しているであろう叙述的なスタイルを適宜採用し個々の出来事を記述している。また、個々の出来事に共通する点として、事例で紹介されるシャイフ A に関わる出来事は、シャイフ A について表象する権力をもつ調査者として認識されただけではなく、シャイフ A の信奉者にさせたい対象でもあった筆者の立会いのもとで生起した、出来事だった点は重要である。さらに、本稿では、シャイフ A の信奉者たちが形成しているある種の宗教集団に注目する。

### 調査について

調査期間は 2004 年 10 月 6 日から 2005 年 3 月 20 日、2005 年 6 月 28 日から 8 月 31 日の間に、短期滞在調査および日帰り調査を含めて、不定期にシャイフ A と交流した合計 96 日である。シャイフ A は、いくつかの英語の単語は知っているが、正則アラビア語とアラビア語のエジプト方言しか使用することはできない。また、本稿ではシャイフ A がまだ生存中であり、彼が筆者に対して明らかにしてはならないと述べた内容も開示するために、シャイフ A がどこの誰であるか特定されてしまうような情報は、極力明示しないこととした。具体的には、実名や地名、廟名、系譜の全貌などは明らかにしていない。その場合、人物の名前の場合は（仮名）、他の名称については H 村など、アルファベットで表記している。博物学的な見地から、そのような情報を明示することを望む方々もおられるであろうが、本稿の目的は、そのような情報を提示することにないで、この点は容赦していただきたい。

---

6) 従来の聖者研究については次にまとめられている [赤堀 2005: 23-40]。

## 1. シャイフ A と人々

### 1.1 村長と長男

シャイフ A に連れられて初めて彼の住む H 村を訪れた時、筆者はシャイフ A に、この村のオムダ（村長）は誰なのか質問した。その時、シャイフ A は彼自身が村長であると言った。しかし、実際はそうでないことが後の調査で明らかになった。

2004 年 11 月 17 日、H 村のシャイフ A 宅で、短期の住み込み調査をすることになった。シャイフ A は、この村に滞在し続けるためには、村長と会わなければならないと、筆者を村長の家へ連れて行った。その理由は、農村に許可なく外国人が住むことは禁止されており、村長に外国人である筆者が滞在することを伝えねばならないとのことであった。つまり、シャイフ A は村長ではなかったのである。

シャイフ A は筆者がこの農村に滞在する理由を、筆者はイスラーム教徒であり、スーフィズムを自分のもとで学ぶためであると説明した。シャイフ A は村長のもとへ向かう途中では、村長は自分の言うことには何でも従うと言っていたが、実際には村長の前では低姿勢であった。

短期調査を終えてカイロに戻った後に、再度、筆者は H 村を事前に約束をせずに訪れた。シャイフ A は一族の廟に参詣に行っていたため留守であった。筆者は、シャイフ A がいない時に村長と話がしたかったため、長男に村長に会いたい旨を伝えた。長男は村長のことが好きではないらしく渋ったが、結局連れて行ってくれた。ちなみに、農村内で筆者が単独で行動することはシャイフ A に禁止されていた。

村長はシャイフ A がいない時には、自分がハググ（メッカ巡礼をしたことを示す尊称）であることなどを語り、イスラーム的にも自分は優れていることを強調し、筆者に自分の家に滞在することを勧めた。また、過去には H 村にもタリーカは存在していたが、いまではある勢力（明確にはしてくれなかった）に弾圧されたために存在していないと述べた。シャイフ A は、筆者に、H 村にタリーカは存在していると述べており、意見が食い違っていた。この話を聞いている間、長男はきまずそうであった。

村長とのやり取りが終わり、村長は筆者と長男を夕食に誘ったが、長男はシャイフ A が帰ってくるからという理由で断った。帰る途中、長男は村長なんかと一緒に食事するかと、道を蹴った。家に戻り、筆者が長男と話をしていると、長男の赤ん坊を妻が抱いて部屋に入ってきた。筆者は長男に、この子供をアズハル大学に入学させて、イスラームの勉強をさせ、シャイフ A のようにしたいのかと尋ねた。長男は、「シャイフ A のようになってほしくない。アズハル大学なんていかせない。自分の息子は医者にするのだ」と、嫌な顔をした。

その後、シャイフ A が戻ってきた。筆者はシャイフ A に村長と話をしたことを伝えた。す

るとシャイフ A は長男を睨んだ。また、筆者に、なぜ村長に会いに行ったと尋ねた。筆者は調査のために農村の情報を得なければならないからだと言った。すると、シャイフ A は、「イスラームや預言者一族についてオムダは何も知らないで、話しても無駄だ」と言った。筆者は、「自分も農村には興味がないが、これは仕事だ。そういう情報を集めないといけない」と説明した。

筆者は、村長の話した内容とシャイフ A の話した内容の食い違いについて、シャイフ A に説明を求めた。シャイフ A は、現在タリーカはこの農村で活動していないことを認めた。しかし、村内の小さな廟に眠る親族の生誕祭の際には、祈祷を行なっていると弁明した。さらに、シャイフ A が実は村長ではなかったことを問い詰めると、「確かに村長ではないが、この村の土地のほとんどは自分のもので、みなはその土地を借りて、農作業をしている」と述べた。しかし、後に、他の住民に聞き取り調査をしたところ、これも事実とは異なることがわかった。

## 1.2 三男

三男は、カイロで働いており、普段は会社の同僚とともにカイロに部屋を借りて暮らしている。彼は、ムスリム同胞団の元団員である。2004 年 11 月 21 日、シャイフ A の留守中に、彼は筆者を元ムスリム同胞団員の家に連れて行った。そこでは、現世逃避や金儲けを理由とした、タリーカ批判を聞かされた。また、預言者一族についても、公言はしなかったが、彼らの態度から良く思っていないことは明らかであった。ここでは、三男も預言者一族について、他のイスラーム教徒とかわらないという見解を示した。

帰宅後、シャイフ A は帰宅すると、彼はそうした三男の価値観を知っていたのであろう、彼は、三男が筆者をどこに連れて行ったか、どのようなことを言っていたかを、筆者に執拗に尋ねてきた。筆者は、三男が預言者一族も他のイスラーム教徒とかわらないと言ったこと以外のことは話した。すると、シャイフ A は不機嫌になり、「彼らは間違っている」と言った。

翌日、三男に会った時には、三男は筆者の前で、預言者一族やスーフィー教団を称揚した。シャイフ A に怒られたのであろう。長男も三男もシャイフ A には表向きは逆らわない。それは、上記から、彼らがシャイフ A の宗教的知識に敬意を払っている、あるいはシャイフ A の宗教的資質を怖れているなどといった理由からではないことが推測できる。筆者が彼ら兄弟の日頃のやりとりを観察した印象からは、シャイフ A が兄弟のなかで最も体格もよく弁が立ち威勢がいいためであろうと思われる。

## 1.3 警察

2004 年 11 月 27 日、筆者は、シャイフ A と、ピエツラ駅から数駅目の K 駅から 5 分ほど歩いたところにあり、預言者一族の廟がある K・モスクに参詣に行った。その帰りに、警察官に呼び止められ補導された。シャイフ A は筆者に、村長の時と同様に、警察はみな自分に従



うから任せろと言った。

警察署内で、シャイフ A は、筆者が日本人で、イスラーム教徒で、自分のもとでスーフィズムを勉強するためにここにいると説明した。また、自分はアズハル大学を出ていて、預言者一族だなどと言った。しかし、警察官はまったく動じず、シャイフ A は気まずそうにおとなしく黙った。その後、長時間拘束されたが、空腹と暑さで苛立っていた筆者が警察官に対して怒ると、他の警察官が出てきて筆者に事情を聞き、解放してくれた。駅まで行く途中、シャイフ A は気まずそうに黙っていた。筆者は、警察官はみなシャイフ A に従うのではなかったのかと質問した。シャイフ A は、「あの警察官は死ぬだろう」と言った。

それから数日後、シャイフ A とともに参詣に行く途中、彼が突然声を上げた。筆者が尋ねると、「彼が死んだ」と言った。筆者は何のことかわからず誰が死んだのか尋ねた。彼は「この前我々を拘束した警察官が今死んだ」と説明した。彼は自分に逆らった者に対して、罰を与えたり、殺したりする能力があるとのことであった。

#### 1.4 アズミーヤ・シャーズィリーヤ教団員

2004 年 2 月 13 日、筆者はシャイフ A と、シャイフ A の親戚かつ幼馴染みであるフサイン（仮名）[男性、30 代前半、カフルッシャイフ県 T 町在住、公務員]とともに、H 村からミニバスで 1 時間ほどの所にある S 村で行なわれたアズミーヤ・シャーズィリーヤ教団のハドラ（集会）に行った。この集会に参加した理由は、S 村における同教団の責任者である男性の娘とフサインが婚約しており、挨拶にいくついでに筆者の希望で集会も見学することになったのであった。フサインは預言者一族であるムガーズィー一族の子孫で、カフルッシャイフ県内におけるムガーズィーヤ・ハルワティーヤ教団の責任者たちを統括する役割を担っている。

シャイフ A と面識がなかったアズミーヤ・シャーズィリーヤ教団の教団員たちは、訝しげにシャイフ A に接していた。フサインからシャイフ A はフサインの親戚である旨を伝えられると、みな様に柔らかな表情をみせた。しかしシャイフ A が預言者一族について説教している間、教団員たちはシャイフ A に説教されることに対して違和感をもっている様子であった。

アズミーヤ・シャーズィリーヤ教団のハドラにおける祈祷は、クルアーンの章句とアッラーや預言者ムハンマドを讃える短い文句によって構成された祈祷文を、座して 1 時間ほど唱えるもので、感情の発露はみられず、アッラーへ思念を集中するタイプのものであった。他の参加者はみなズィクルの内容が記してある冊子を見ながら読誦していたにも関わらず、シャイフ A はその冊子を受け取るのを拒否し、時折唱えるのに遅れることはあったが、目を閉じ読誦した。クルアーンの章句と、アッラーと預言者に対する短い賛辞の繰り返しなので、遅れながらも唱えることができたのだろうと推測できるが、これについてシャイフ A に質問したところ、私には全てがわかる、普通の人間とは違うという趣旨の説明をした。



### 1.5 ムガーズィーヤ・ハルワティーヤ教団員

2005 年 2 月 21 日、筆者は、単独でビエッラ市から数駅の S 駅へ調査に行ったことがある。そこで、ムガーズィーヤ・ハルワティーヤ教団の責任者である人物と出会い、同教団に関して記されている冊子をもらった。そこには、ムガーズィーヤ族の系譜が記してあった。彼にフサインのことを聞くと知っており、フサインが言っていたように、フサインはカフルッシャイフ県内における同教団の各責任者を束ねる人物であるという。続いて筆者は、シャイフ A について質問したが、彼はシャイフ A についてはまったく知らず、I 一族についても知らないと言った。

このことについて、後日シャイフ A に報告した。シャイフ A は、筆者が見せたムガーズィーヤ・ハルワティーヤ教団の冊子に目を通した。シャイフ A は、そこに記されている系譜の内容は正しいとした上で、上記の責任者によくないことが起こると述べた。その理由は、シャイフ A に断りなく一族の系譜に関する情報を与えたためだという。

### 1.6 フサインとその家族

シャイフ A は、様々な人々の相談ごとに乗る。例えば、2004 年 12 月 2 日、シャイフ A はフサインの姉であるアーイシャ（仮名）〔女性、40 歳代、主婦〕とその夫であるアフマド（仮名）〔男性、40 歳代、農作業〕の夫婦仲が険悪で別居しているとの連絡を受けて、カフルッシャイフ県の T 村に向かい、アフマドの相談に乗った。その後、夫婦は再度ともに暮らすようになった。

また、病気の者を治療することもある。アーイシャは頭痛が続いたときに、シャイフ A が頭に両手をのせて祈祷したら治ったと述べた。実際に、筆者は、2005 年 1 月 12 日、アーイシャの娘が、腕の痛みをうったえた際に、シャイフ A がその腕をさすりながら祈祷をする現場を見た。また、ある村で事件が生じた時には、その村へ行き裁くこともあるという。過去にある村の男女が婚前交渉を行なった際には、死刑にしたことがあるそうだ。こうしたことについて、警察官は知っていても口出ししないとのことである。

フサインおよび、フサインの父親と姉夫婦は、シャイフ A を強く信奉している。父親は、年長者にも関わらずシャイフ A を敬っており、従順である。彼らは、飲食物の用意からなまでに、シャイフ A の命令には従順に従う。シャイフ A に対する彼らの従順さは、敬っているという以上に怖れているといった方が適切であるくらいである。彼らは、上述のシャイフ A の兄弟たちとは違い、シャイフ A が不在の時にもシャイフ A の意に背くような発言は決してしない。彼らは一様に、シャイフ A は自分たちを天国へ導いてくれると述べる。アーイシャは、シャイフ A のためのモスクが建つ夢を見たと、熱く語った。またフサインおよび、フサインの父親と姉夫婦たちは「シャイフ A に従っていれば、最後の審判の際に天国へ導いてくれる」といった内容を口々に述べる。

しかし、そこにみられるのは、受動的な彼らの姿だけではなく、積極的にシャイフ A からイスラームに関することや、預言者一族のことについて聞き学ぶ姿勢である。時には、彼らから積極的にシャイフ A に質問し、長い時間、シャイフ A による説教が行なわれる時もある。

また、彼らがなぜこれほどシャイフ A にひかれ従っているのかについて、フサインおよび、フサインの父親と姉夫婦たちに質問すると、上記の治癒能力などの実体験を通じてシャイフ A の特別な能力を信じているなど、「超自然的能力」を原因として挙げることが多い。それに比べて、イスラーム学の権威であるアズハル大学出身であるシャイフ A が有するイスラームに関する知識などについては、筆者が「イスラームの知識を多く有しているからか」などと質問すれば、彼（彼女）らはうなずくが、それは彼（彼女）らにとっては当然のことのようであり、あえて彼（彼女）らが、上記のような質問に対して口に出して答えることはない。

以上のようなシャイフ A とフサインおよび、フサインの父親と姉夫婦たちの関係性を筆者は観察し、シャイフ A に対して、信奉者たちを「タリーカのムリード（教団員）のようだ」といった。シャイフ A は「彼らは私のムリードだ」と述べた。また、シャイフ A は、筆者に対して「将来的にはフサインが秘書となりタリーカができる」と述べた。しかし一方で、シャイフ A は「まだタリーカを始める段階ではない」と述べた。ここでシャイフ A が述べた「タリーカ」とは、集会が定期的に行なわれ、そこで祈祷が行なわれ、また、シャイフ A の教えが書かれた本などが教団員に配られるという特徴をもつ集団のことである。それは、現在エジプトにおいて存在する多くのタリーカが有する特徴である。これらについては、その場に同席していたフサインも同意していた。ちなみにフサインの姉たちは、筆者の質問に対してシャイフ A はタリーカのシャイフどころではなく、救世主であると述べている。

また、信奉者たちはシャイフ A の提示する後述の「秘密」などを知らない者に対して、排他的な態度を示す。後述のアブドゥはシャイフ A の魅力にひかれた者であるが、信奉者たちは彼に対して少し冷たい態度をとる様子が見ええる。筆者がこのことについて、アーイシャに尋ねたところ、彼女は「アブドゥはシャイフ A についてまだ何も知らない」と述べた。また「シャイフ A がアブドゥを気に入る、いろいろなことを教えるかどうかは分からない」とも述べた。このように、信奉者たちはシャイフ A を核として、他の人々とは差異化できる排他的なある種のコミュニティを形成している。

#### 1.7 バイユーミーヤ・アフマディーヤ教団員

2004 年 10 月 6 日、タンター市におけるアフマド・バダウィーのマウリド（生誕祭）の時に、シャイフ A は、バイユーミーヤ・アフマディーヤ教団の祈祷に参加した。同教団の祈祷は、楽器の伴奏を伴う詩の読誦があり、リズムカルである。その詩のリズムに合わせて、みな上半身をくねらせ、段々と恍惚状態に入っていく。シャイフ A は祈祷を行なう教団員たちの輪のなかに入り、身体を揺らし「アッラー、アッラー」と声をだしながら、恍惚状態に入っ

いくひとりひとりの様子をうかがっていた。

同教団の責任者がいるにも関わらず、シャイフ A が祈祷において、そのような中心的な役割を果たしたのは、理由がある。シャイフ A は、はじめ参加者の片隅でこの祈祷に参加しようとしていた。しかし、シャイフ A の親戚である教団員が、責任者にシャイフ A を預言者一族の子孫であると紹介すると、責任者はシャイフ A を丁重に中央の方に招いたのである。ハドラ終了後に、シャイフ A にこのことについて質問した。シャイフ A はどのタリーカでも同じように扱われるらしく、その理由は、彼が預言者一族だからだそうである。

また、この祈祷の最中、激しくトランス状態に入り転倒するに至った教団員のひとりであるアブドゥ（仮名）[男性、42 歳、カフルッシャイフ県 M 町在住、小学校の教師]は、この日初対面であったにも関わらずシャイフ A にひかれて、筆者の調査中にもその後度々シャイフ A のもとを訪れ、参詣に付き添ったりした。アブドゥはシャイフ A に会った時に、シャイフ A が預言者一族であるというだけではなく、もっと大きな人物であると感じたとのことである。

#### 1.8 参詣に訪れた人々

2004 年 11 月 10 日、有名な預言者一族かつ聖者であるカフルッシャイフ県ドゥスーク村のイブラヒーム・ドゥスークの廟を、シャイフ A とフサイン（仮名）とともに参詣した。シャイフ A は廟に両手を当て、祈祷を行なった。フサインがイブラヒーム・ドゥスークを讃える歌を読誦した後、シャイフ A とフサインは祈祷を行なった。こうした行為が目立ったためか、祈祷終了後、周囲の人々十数人がシャイフ A のもとに集まった。フサインは、詰め寄る人々にシャイフ A がイブラヒーム・ドゥスークの子孫であると説明した。すると、みな彼の身体に触れたり、イスラームに関する質問をしたり、生活上の悩み相談をしたりした。シャイフ A は、クルアーンやハディースを引用しながら、彼らに対応していた。そのうちのひとりに、「なぜシャイフ A に触れるのか、バラカ（恩寵）があるためか」と質問すると、「そうだ」と答えた。

## 2. 「真」のタリーカと秘密

シャイフ A によれば、元来タリーカとは、アサブ・アル=バイト（家〔預言者一族〕の神経〔神経網=木の枝のニュアンス〕）であり、アフル・アル=バイト（預言者一族）そのものであるという。他のタリーカは、ムヒッブ（単に聖者を愛する者）とムリード（一般教団構成員）など預言者一族以外の者により構成されており、元来のタリーカではないとのことである。

現在エジプトには、ニカーバ・アル=アシュラーフ（預言者一族組合）<sup>7)</sup>があり、同組合がエジプト全土の預言者一族を管理している。フサインによれば、預言者一族に属する各一族には、ナキーブ・アル=アシュラーフ（預言者一族の責任者）が存在していて、一族の系譜の継

承・管理や、子孫が生まれた際に、エジプトの各県にある預言者一族組合支部への申請などを行なっているとのことである。また、預言者一族組合に、預言者一族であることを承認された場合には、証明書とカードが発行される。<sup>8)</sup>

シャイフ A は、筆者が携帯していた公認タリーカの一覧表を見て、現在タリーカのシャイフで預言者一族に属しているのは、ムガーズィーヤ・ハルワティーヤ教団とバイユーミーヤ・アフマディーヤ教団のシャイフだけであると述べた。しかし、フサインが上記の S 村におけるアズミーヤ・シャーズィリーヤ教団の責任者の娘と結婚した後は同教団のシャイフも預言者一族であると述べた。<sup>9)</sup>

2005 年 3 月 11 日、フサインの結婚式に、ビヘイラ県の預言者一族組合支部の責任者で、ハーシミーヤ教団の責任者でもあるムスタファ（仮名）が参加していた。筆者はムスタファに、スーフィー教団を研究している理由を、いつもどおり、イスラームを理解するにはスーフィー教団が重要だからであると述べた。すると、ムスタファは、タリーカのなかには、預言者一族に属さない者がシャイフであり、誤っているものが多く存在する。そのため正しくイスラームを理解したいならば、タリーカよりも預言者一族について研究すべきだろうと、少し嘲笑気味に述べた。その時、シャイフ A は、いつも自分が述べていることと同じことをムスタ

---

7) ビヘイラ県の預言者一族組合支部の責任者で、ハーシミーヤ教団の責任者でもあるムスタファ（仮名）によれば、組合員は、毎月 5 ギニー（1 ギニー＝約 20 円）を組合に納めることになっている。しかし、経済的に払えない者は払う必要がなく、逆に預言者一族の血を絶やさないという名目で、いくらかの援助金が支払われる。組合員には、定期刊行物『アシュラーフ（預言者一族）』が定期的に配布されている。現在、組合長はリファーイーヤ教団のシャイフでもあるアフマド・カーミル・ヤースィーンである。また同組合は、長い間カイロ市内のザマーレク地区に事務所を構えていたが、いわゆるイスラミック・カイロのアズハル大学付近に大規模な施設を建設し、2004 年以降は事務所をそこに本格的に移している。ちなみに、移転については、この事務所が建設中に、東長靖氏から情報を得た。

8) エジプトのタリーカ、イスラーム世界理解における預言者一族の重要性については次でも述べられている [Hoffman 1992, 1995: 50-88; 小杉 1985]。また、預言者一族一般については、次が参考になる [森本 1999, 2005]。

9) 自らも預言者一族であり、エジプトのタリーカの事情に詳しいアズミーヤ・シャーズィリーヤ教団のシャイフによれば、エジプトのタリーカを管轄するスーフィー教団最高評議会に所属する 78 教団のシャイフのうち、3 分の 2 程度が預言者一族とのことである。また、自らも預言者一族で、タリーカと預言者一族の関係について詳しいアフイーフィーヤ・シャーズィリーヤ教団のシャイフに、タリーカの一覧表（各タリーカのシャイフの名前も記載されている）を見せて、そこに預言者一族に属するシャイフをペンでチェックしてもらった結果では、18 名のシャイフが預言者一族であった。しかし、各シャイフによってどのシャイフが預言者一族であるかについての見解は異なるので、正確な実数を把握するのは困難であろう。例えば、自身を預言者一族とするファーリディーヤ・カーディリーヤ教団のシャイフは（実際に、組合証をもっていた）スーフィー教団最高評議会の議長であるシンナーウィーは、母方が預言者一族であるだけなので預言者一族ではないと述べた。しかし、父方が預言者一族であるかどうかは問題ではなく、シンナーウィーは預言者一族だという教団シャイフもいる。また、上記カーディリーヤ教団のシャイフは、注 7) で挙げた組合長を正確には預言者一族ではないとも述べた。また、彼によれば、裕福な者のなかには組合に金銭を払って預言者一族として認めてもらう者もいるという。つまり、預言者一族の認証に関しては、各人がそれぞれの「基準」をもっており、統一の見解を見極めるのは難しい。

ファが言ったにも関わらず、筆者をかばうためか、筆者が行なっているスーフィー教団の研究は重要だと述べた。その後、両者は論争になったが、結局シャイフ A は、預言者一族が特別であることについてはクルアーンに記述があるという点と、預言者ムハンマドの血と性質を継承している者がイスラームの正しい知識を継承している点に話が及ぶと、そのまま同意した。その時のシャイフ A は落ち込んだ様子であった。

この結婚式の後、シャイフ A は、論争で情けない姿を見られたためか、あるいは筆者がムスタファに興味を示したためか、突然、次の内容を語った。

シャイフ A によれば、シャイフ A の祖父であるムハンマド（仮名）は第 12 代イマームのムハンマド・ムンタザルの生まれ変わりだったという。またマフディー（救世主）<sup>10)</sup> は全世界の空気、空、土のなかに存在していながらも、ガイバ（お隠れ）しているため一般の人々には不可視な存在であるという。将来アッラーが彼に命令をくだす時に、彼が世界を作り変える。その時期がいつであるのかは、アッラーのみが知っているとのことである。

この話の後、シャイフ A は、これから述べる内容は絶対に秘密で、もし他言したならば筆者は死ぬと前置きした後で、シャイフ A と第 3 代イマームのフサイン、<sup>11)</sup> およびアフマド・バダウィー<sup>12)</sup> はひとつだと説明した。これは生まれ変わりというよりも、シャイフ A のなかに両者が存在しているという意味だそう。また、シャイフ A は実は上で述べた救世主でもあるのだという。さらに、彼は預言者ムハンマドの生まれ変わりだという。

シャイフ A によれば、現在のムガーズィーヤ・ハルワティーヤ教団のシャイフは、時期が来るまでシャイフ A は表に出ることができないために、代わりにその役割を果たしているだけだという。また、将来自分を中心としたタリーカ（アフマディーヤ教団）ができるということだ。その時、第一段階として、シャイフ A の一族全員がそのタリーカに属し、その次に全エジプト人がそのタリーカに属することになるのだという。また、このタリーカは全世界に広まっていき、それに属さない者は、終末において地獄に行くことになるとのことである。このようにシャイフ A は、自らの存在を特別なものとして認識しており、自らが重要な役割を果たす終末観とそこで救われるための救済方法論（自らを中心としたタリーカに属すること＝自らに従うことによって救われる）、あるいはもっと広くいえばそれら全てを含む独特な「世界観」をもっているのである。

10) マフディーは、「初期には預言者ムハンマドなどを指す語として用いられ、その後、終末の前にこの世に現れ、邪悪によって乱されたイスラム社会の秩序を正し、真のイスラーム共同体を築くメシア、救世主を指すようになった語」[大塚ほか 2002: 925]。

11) 「預言者ムハンマドの娘ファーティマとその夫であり預言者の従弟でもあるアリーの間の次男」(『岩波イスラーム辞典』の「フサイン」の項からの抜粋)。

12) 13 世紀に活躍した有名な聖者。エジプトのタンター市に彼の聖廟がある。彼の生誕祭には、数十万（数百万といわれることもある）の人々が集まる。



上記の秘密を知っているのは、現状では彼の兄弟姉妹やフサイン、フサインの父親、姉夫婦など、ごく一部の限られた者だけという。実際に、この話を三男とフサインにした際に、彼らは目をまるくして、誰に聞いたか問い詰めてきた。また、シャイフ A から聞いたと話すと、かなり驚いた様子であった。逆に筆者はフサインと三男に、そのことを知っていたのか尋ねた。両者は知っていたと述べた後、そのことを絶対に他言するなどと言った。

フサインは、ムガービー一族と I 一族に関して、「真」の歴史が記されている書物をなかなか筆者には教えてくれなかった。しかし、フサインは上記の秘密をシャイフ A が筆者に伝えたことを、携帯電話を使いその場でシャイフ A に確認をとり、それが事実だとわかると、6 種の書物<sup>13)</sup> についてその入手方法も含めて筆者に教えてくれた。そのうちの 2 種の書物はフランスにしかないとのことであった。

フサインによれば、これらの書物以外は、全て誤った内容であるため、読んでも意味がないとのことである。また、その書物のなかのどの箇所の内容が正しいかを判断できるのは、代々、預言者一族の歴史を教授されている者だけだという。実際にフサインは、筆者がシャイフ A に預言者一族のことを尋ねると、シャイフ A に命じられてすらすらと一族の歴史を語る。また、代々の系譜が記された直系約 30cm の巻物が残されており、これを管理しているものが一族のなかにはいた。全ての箇所を調べることはできなかったが、筆者が見ることができた巻物に記されたそれぞれの名前の箇所には血判がおされていた。

### 3. シャイフ A と彼を聖者として認識する信奉者たちの集団

#### 3.1 シャイフ A とタリーカ

1.6「フサインとその家族」で述べたように、シャイフ A と信奉者の認識に立脚すれば、定期的な集会や教義書の出版などを行なっていない彼（彼女）等の関係性はまだタリーカではない。しかし、筆者の観察からは、独特の「世界観」と救済方法に従う信奉者たちは、同一の価値観によって新たに意味づけられた者たちによる、他のイスラーム教徒とは差異化されたある種の宗教集団に見て取れた。これは、「世界観」を共有していないアブドゥーに対する態度でわかるように、外部に対する排他性と境界をもち、複数人が特定かつ同一の価値観に立脚した行動原理に従う一定の秩序をもった集団である。

研究上タリーカの定義や分析概念としてのタリーカがまだ明確に定まっていない現状からすれば、この集団に関して次のように想定することもできる。<sup>14)</sup> タリーカには、恩寵など聖者的

13) このなかには全集も含まれているため、6 冊ではなく 6 種の書物と表記した。

14) ここで、既存のタリーカの例を示す。例えば、ティジャーニー教団は、教団創設者が独特な世界観・救済方法を提示したことで有名である [Abun-Nasr 1965; 新井 2006b]。同教団の成員は強いエリート意識と排他的成員意識を有している。また、ジャズーリーヤ・シャーズィリーヤ教団の事例でも、教団創設者は独特の世界観・救済方法を提示している [新井 2004, 2006b]。

要素を有するシャイフにコミットする者を、前述のようにムヒップやムリードといった、コミットメントの度合いによって差異化する呼び名がある。これを、シャイフ A の関係性に当てはめて考えてみると、次のようになる。ムヒップはシャイフ A のもとに恩寵や知識を希求して流動的に集まる人々であり参詣時に集まった人々やアブドゥの例などである。ムリードは一般の教団員で、シャイフを信奉し、シャイフの提示する「世界観」のなかで生き、彼の指示・命令（救済方法）に従って生きている者たちである。フサインや彼の父親、姉夫婦などは、これに当てはまるだろう。

またこのシャイフ A を中心とした信奉者たちの関係性は、彼（彼女）らもそのように認識しているように、将来的に、宗教集団論でいわれているように、教義体系や定期的な活動などが整備・付加され、外部との明確な差異化が明示的なかたちで強調されれば、当事者の側からも、その分析視角からも、その集団の構成要素からタリーカ＝「教団」として認識されるようになると思われる〔森岡 1989〕。

つまり、シャイフ A と信奉者たちの集団は、彼らの認識だけを頼りにすればまだタリーカではない。しかしタリーカの定義が定まっていない研究の現状からすれば、見方によっては特定の聖者のもとに集まる人々によって構成されるタリーカであるともみなすこともできる。また、彼（彼女）らの認識と分析的視点の両方の合致する見解としては、教義体系や定期的活動が整備・付加された「教団」としてのタリーカ以前の集団、タリーカ＝「教団」の萌芽状態であることが指摘できる。この関係性は、「はじめに」で紹介した古林が述べていたカリスマ的な聖者の出現によって生じ、その聖者が没することによって消滅してしまう、19 世紀以前における「教団」以前のタリーカ、あるいはそのタリーカの萌芽状態であるとも考えることもできるのである。

### 3.2 非聖者としてのシャイフ A

上記のようにシャイフ A と信奉者の関係性は、タリーカの萌芽状態としても見て取れるものであった。それでは、シャイフ A が聖者として現前しているその関係性とはいかなるものなのであろうか。これについて考察する前に、シャイフ A があくまで、ある特定の人々の間でしか聖者ではない点について述べておく。

まず、前節までで述べた個々の事例は、「はじめに」で述べたように、シャイフ A について表象する権力をもつ調査者として認識されていただけでなく、シャイフ A の信奉者にさせたい対象でもあった筆者の立会いのもとで生じた、シャイフ A に関する出来事だという点を確認しておく。そのため、個々の出来事におけるシャイフ A の振舞や言動は、筆者の前で自らを、より大きな存在あるいは権威的な存在として表象する実践であったといってよいであろう。

例えば、シャイフ A は、筆者に対して、はじめは H 村における村長であると述べた。しか



し、それが嘘であることが明るみになると、彼はその代わりに H 村の土地のほとんどは自分のものであると述べた。また、彼は、警察官は自分の言うことに従うと述べ、アズハル大学出身で預言者一族であることを示したが、そのとおりにはいかなかった。すると彼はその警察官に罰を与える超自然的能力を有するという自己表象を行なった。また彼は、ムガーズィーヤ・ハルワティーヤ教団の責任者がシャイフ A のことを知らず、シャイフ A の許可なしに筆者に情報を与えた際にも、その教団員に不幸が起こると述べていた。これらは、筆者に対して、シャイフ A が自らをより権威的な存在として誇示する効果を狙ったものでもあったと考えられる。また、シャイフ A は、預言者一族組合ビヘイラ県支部の責任者ムスタファに論争で敗れた後には、「自らの存在の秘密」を明らかにした。これも上記と同様の効果を狙ったものと考えられる。つまり、シャイフ A は、状況適応的に、村長職や土地所有といった世俗の権威、アズハル大学や預言者一族という宗教的権威、および超自然的能力を有するものとして自己表象することで、筆者に対して自らを注目すべき聖者であり、また権威的存在として誇示しようとする実践を行っていたのである。

しかし、いくらシャイフ A が筆者に対して、聖者が有する特別能力や預言者一族の血統などを誇示しようとも、聖者自らの「名乗り」やイスラーム思想上の聖者論との整合性、特別能力や血統の科学的実証などに依拠する実体論的把握ではなく、民衆の側の認識およびそこでの関係性のなかにおいて現前する「聖者」に注目する本稿の方法論的立場からすれば、上記の事例からはシャイフ A を聖者として考察することはできない。つまり先に述べた人々の側がシャイフ A を聖者として認識し振る舞っていないため、ここでの関係性において、シャイフ A は聖者ではないと本稿ではみなすのである。

### 3.3 聖者としてのシャイフ A

本稿の立場からすれば、シャイフ A を聖者として措定し考察できるのは、フサインや彼の父親、アフマドとアーイシャ夫婦などの信奉者やアブドゥ、参詣時にシャイフ A の恩寵を求めて集まった人々など、シャイフ A を恩寵や特別能力を有する聖者として認識し振る舞っている人々との関係性においてである。

シャイフ A と信奉者たちの関係性を考察する上で、まずは 1.6 の「フサインとその家族」の事例でも述べたように、信奉者の側でも受動的にシャイフ A に接しているだけではない点が挙げられる。これについては、ベドウィンの聖者をめぐる信仰実践を表現した次の赤堀の説明が適切であろう。それは、「高度の学識をその一環として含み、それを外部から恩寵という概念で表象される力として積極的に獲得する「民衆」の姿」[赤堀 1995: 116] である。

また大塚は、交換論的視点からアッラーと聖者、信徒の関係を分析した [大塚 1989]。そこでは信徒が聖者に求めるものには、「現世利益」と「来世利益」があった。本稿の事例におけるフサインら信奉者たちは、病気の治癒や日常生活における諸問題から天国へ行けることまで

をシャイフ A に期待している点から、彼らは「現世利益」と「来世利益」の両方をシャイフ A との関係において獲得しようとしていたといえる。

参詣時にシャイフ A のもとに集まった人々も、「現世利益」や「来世利益」<sup>15)</sup>に繋がる恩寵やイスラームの知識を求めていた。しかしここで重要なのは、フサインら信奉者と彼らの相違である。フサインやその家族たち信奉者は、参詣時の人々とは違って、知識や恩寵の獲得という以上に、2 節で述べたシャイフ A が提示する独特の「世界観」に立脚して生きているのである。また、この「世界観」のなかで生き、シャイフ A に従うことにより天国へ行けるという信念のもと、飲食物の用意をも含むシャイフ A の命令に従う諸行為を忠実に実践している。

この「世界観」のなかで生きること、あるいは救済方法に従うことは、シャイフ A に対して、信奉者たちがシャイフ A に怖れを伴うほど強く従うというかたちで現象していた。つまり、ここでは一般のイスラーム教徒が共有しているような通常の善行を日々の暮らしにおいて積むというよりも、シャイフ A の命令に従っていけば天国に行けるという行動原理が信奉者に強く働いているのである。

大塚が指摘しているように、イスラームの理念体系は、アッラーと信徒の「互酬的交換」関係を基本としている [大塚 1989]。しかし、実際には信徒にとって天国へ行けるかどうかは「アッラー・アアラム (神のみぞ知る)」であり、「自らはこれだけ善行を積んでいるので、その見返りとして確実に天国へ行ける」などと述べる者に出会ったことはない。どの程度、善行を積みば天国へ行けるかは、一般の信徒にとっては基本的に不可知なのである。つまりアッラーと信徒の「互酬的關係」は、信徒がいくら善行とされる諸行為を積んでも、最終判断は基本的にアッラーに委ねられている点で、実態レベルにおいては厳密には成立していないのである。

こうした「互酬的關係」の実態レベルにおける「不成立」が、「もしかしたら地獄に行くのではないか」という不安を、信徒たちに生々しく抱かせる瞬間があるのは理解できる。そのため、コミュニケーションが可能な現存の具体的な人物が提示する、天国行きを保証する「世界観」と救済方法が、魅力的な求心力をもって立ち現われるのである。1.6 「フサインとその家族」で述べたように、シャイフ A の「超自然的な能力」の実体験や、シャイフ A の登場する「夢」などは、その求心性をさらに高める効果をもっているといえるであろう。<sup>16)</sup> 実際に、1.6 の同箇所中で、信奉者たちは「シャイフ A に従っていけば、最後の審判の際に天国へ導いてくれる」と強く信じている。

つまり、筆者は、本稿で紹介した事例から「タリーカの萌芽状態」において、天国へ行くと

15) 「現世利益」と「来世利益」については大塚の提示した分析概念を採用した [大塚 1989 117-134]。

16) 具体的な人物が提示する知識、およびそれが生む崇敬などに関しては次が参考になる [大塚 1989: 158; 赤堀 1995: 116]。

めに現世で立脚すべき「世界観」と従うべき救済方法を、現身の具体的な人間（聖者）から積極的に獲得しようとする信奉者の姿と、そこに生起している他との境界を有する宗教集団を考察したのである。

## お わ り に

本稿では、シャイフ A が聖者として立ち現れるのは、あくまで彼を聖者であると信じそのように振る舞う人々との関係性においてである点を重視した。またシャイフ A が聖者として現前しない場合の関係性にも注目することによって、「聖者」シャイフ A の人物像をより実態に即したかたちで描写した。

また、単にシャイフ A に知識や恩寵を求める人々と、シャイフ A の提示する「世界観」と救済方法に従う信奉者たちとの相違に注目した。後者においては、外部との境界をもつ宗教集団が生起していた。タリーカ研究では、ある人間関係をタリーカとしてみなす場合、そこに集まる人々、構成員らの認識あるいは「名乗り」に立脚するのか、それとも組織の成熟程度、定期的な儀礼行為、教義体系の整備などに注目し、類型論を通じて分析概念としての「タリーカ」を精緻にしていくのかなど、方法論的な課題がまだ放置されたままである。そのため、こうした現状では、上記の宗教集団は、タリーカとして考えることもでき、またタリーカ＝「教団」の萌芽状態として捉えることもできた。今後、こうした方法論的な問題を意識し、タリーカ研究を進めていく必要があるであろう。

## 引 用 文 献

- 赤堀雅幸. 1995. 「聖者が砂漠にやってくる—知識と恩寵と聖者の外来性について」『オリエント』38 (2): 103-120.
- . 2005. 「聖者信仰研究の最前線—人類学を中心に」赤堀雅幸ほか編『イスラームの神秘主義と聖者信仰』東京大学出版会, 23-40.
- Abun-Nasr, J. M. 1965. *The Tijaniya: A Sufi Order in the Modern World*. Oxford, New York and Toronto: Oxford University Press.
- 新井一寛. 2004. 「タリーカにおける組織的革新性と宗教的感情の発露—現代エジプトにおけるジャーズリーヤ・シャーズィリーヤ教団の事例を通じて」『日本中東学会年報』20 (1): 91-120.
- . 2006a. 「タリーカ（スーフィー教団）のマウリド（生誕祭）における祝祭性・非祝祭性—現代エジプトにおけるジャーズリーヤ・シャーズィリーヤ教団の活動状況から」『宗教と社会』12: 37-64.
- . 2006b. 「タリーカ（スーフィー教団）の形態論的考察—現代エジプトにおけるティジャーニーヤ教団の事例を通じて」『イスラム世界』67: 1-25.
- 大塚和夫. 1989. 『異文化としてのイスラーム—社会人類学的視点から』同文館.
- . 2000. 『近代・イスラームの人類学』東京大学出版会.
- 大塚和夫・小杉 泰・小松久男・東長 靖・羽田 正・山内昌之編. 2002. 『岩波イスラーム辞典』岩波

書店.

Gellner, E. 1969. *Saints of the Atlas*. London: Weidenfeld and Nicolson.

小杉 泰. 1985. 「現代イスラームにおける宗教勢力と政治的対立ーカイロにおけるアズハル=フセイン複合体とサラフィー主義」『国立民族学博物館研究会報告』10 (4): 959-1000.

古林清一. 1975. 「エジプトにおけるスーフィー教団と聖者崇拜」『史林』58 (2): 61-92.

鷹木恵子. 2000. 『北アフリカのイスラーム聖者信仰ーチュニジア・セダダ村の歴史民族誌』刀水書房.

De Jong, F. 1978. *Turq and Turuq-Linked Institutions in Nineteenth Century Egypt: A Historical Study in Organizational Dimensions of Islamic Mysticism*. Oxford: Oxford University Press.

Hoffman, V. 1992. Devotion to the Prophet and His Family in Egyptian Sufism, *Middle East Studies* 24: 615-637.

\_\_\_\_\_. 1995. *Sufism, Mystics and Saints in Modern Egypt*. Columbia and South Carolina: The University of South Carolina Press.

森岡清美. 1989. 『新宗教運動の展開過程』創文社.

森本一夫. 1999. 「サイードとシャリーフームハンマドの一族とその血統」『岩波講座歴史10 イスラーム世界の発展7-16世紀』岩波書店, 293-315.

\_\_\_\_\_. 2005. 「サイイド・シャリーフ研究の現状と展望」赤堀雅幸ほか編『イスラームの神秘主義と聖者信仰』東京大学出版会, 229-254.